

# 藤村文学における文章用語の特徴

——「桜の実の熟する時」を中心として——

植村邦正

## The Characteristics of Expressions in Tōson's Works

Kunimasa UEMURA

### まえがき

島崎藤村の「桜の実の熟する時」を中心にして、藤村文学の文章の特徴と思われる語句、表現法等について考えてみようと思う。特にこの作品を取り上げたのは、

- (1)自然主義文学の成熟期の大正2～6年に書かれ、その間前後数回にわたり、稿を練り直し、書き改められたもので、彼の中期の代表作であること。
  - (2)従って、老練な用意周到な筆致で綴られており、彼の文章の特徴を考えるのに適当と思われること。
  - (3)本学で現在教材として使用していること。
- 等によるものである。

例文中、「……」とカッコのつけてあるのは、会話文であることを示す。

例文のはじめの数字は岩波文庫本のページ数を示す。他の作品の場合は、例文の末尾に出典を示すと同時に、そのページ数を示す。

### 語句の上から見た特徴

#### (1)俗語の混用

ここで「俗語」と言うのは、地の文の中に用いられた方言、訛語、および俗語的と思われる語のことで、したがって会話文中に用いられた「俗語」はここでは取り上げない。

6片側のやぶの根きに寄りながら……。

これは「際」きわ「側」そば「傍」かなわらの意味の方言。

40「江戸は火事早いよ。」なぞと言って……。

45大勝の帳場なぞに見つけるといことすら、……。

72イギリスの言葉を学び初めた時のことなぞが引き出されて行った。

61おじさんなんぞから見るとずっとありがたみのない人だ。

「なぞ」「なんぞ」は、あることがらをそれだけに限定せず、「例えば」といった気持をこめて、例示する副助詞。「など」にくらべやや俗語的。

16あだかも一つの黙示よろこびに接するかのようにして眺めていた。

23あだかもそれが現在の歓喜であるかのごとくにも感ぜられる。

27捨吉とはあだかも兄弟のようにして育てられて来た少年だ。

185堀割の水があだかも荷船ていはくじよの碇泊処の趣をなしている……。

「あたかも」と同じ副詞。あとに「ように」などの語をともなり場合が多い。

111 やっぱしおとっさんは国の方にてほしい。

「やっぱし」は「やはり」「やっぱり」と同じ副詞。「やっぱり」も俗語的であるが、「やっぱし」はより局地的な方言と考えられる。

23 あの大伝馬町の奥深い商家で生長った大勝の主人の秘蔵娘……。

27 皆の丹精でずんずん成長って、めっきり強壯になった。

102 いっしょに生長って行った年の若い人たち……。

103 そろいもそろって皆急激に成長って来た。

「しとなる」は「ひとなる」と同じ。「ひとなる」は「人となる」「一人前の人間となる」の意味で、すでに近松の浄瑠璃等にあらわれている。音韻変化で「ひ」が「し」となったものである。

63 玉木さんの男の声は……捨吉が歩いていた庭の青桐のところへ響けて来た。

この「響ける」は下一段活用の動詞。四段活用の「響く」と同じ意味だが、やや語感がくだけて聞こえるだけ俗語的と言える。「桜の実の熟する時」の中には一例しかないが、よく用いる語であるので、他の作品から拾えば、

68 その音は半分眠っているような馬小屋の方へもひびけて行った。(新潮文庫「夜明け前」一上)

81 その苦しい叫び声は……岸本の頭脳へ響けた。(新潮文庫「春」)

68 高い梯子の上から音をさして水の中へ飛込むもの……。

この「さして」は「させて」というべきところ。「させ」は下一段活用の使役動詞「させる」の連用形。これを四段活用化したもので俗語的用法と考えられる。

70 捨吉が二階へ上って行って祈禱の仲間入をするようになったは、同じ居候の玉木さんを憐むという心からであった。

72 友達の前に置いたは、青いクロオス表紙のウォルズウォースの詩集だ。

この「なったは」「置いたは」は、「なったのは」「置いたのは」という言い方の俗語的用法。

## (2) 文語の混用

51 初めて批評というものの意味を高めたとも言いうるあの少壮な哲学者……。

122 農家で麵類を用うるといふ……。(新潮文庫「破戒」)

140 取り返しうる時代に向いて来た。

194 捨吉がその歡喜を感じうるころは……。

102 俳優への贈り物か見ゆる紅白の花の飾り台……。

67 過ぐる十年の間の苦勞した骨折り……。

106 忘れていた過ぎし月日のことが捨吉の胸をゆききした。

83 はてしなき暗闘を賦与し、富める長老と貧しい執事とを争わすだろ。

以上の例は主として動詞であるが、中には助動詞として、「過ぎし」の「し」、「富める」の「る」、「争わす」の「す」、形容詞として、「はてしなき」のようなものもある。

12 若いキリスト教徒の間に行なわるる青年男女の交際……。

23 日頃上に立つ人達から……督促せらるることは……。(新潮文庫「夜明け前」一上)

29 このへんの田畑はすべて石垣によってささえらるる。(岩波文庫「千曲川のスケッチ」)

36 幕府内でも有数の人材に数えらるる水野筑後……。(新潮文庫「夜明け前」一上)

36 日頃先輩から教えらるることは……。(新潮文庫「夜明け前」一上)

- 45この講演はキリスト教主義で催さるるのであったから。
- 58他界の自然は……身に染みるように思わる。(新潮文庫「破戒」)
- 84他界を望むような心地もせらるのであった。(新潮文庫「破戒」)
- 148菅が皆から力を頼まるただ一人の男性である。
- 149女の手ばかりでささえらる家族的な下宿……。
- 175多くの牧師や伝道者によって説かる父と子と精霊の三位を一体としたようなもの……。  
この「る」「らる」はみな「る」「らる」という助動詞の連体形。この形を終止するところに用いているのは注意してよい。
- 38過ぎ去った日のはかなさ味けなさを深思せしめずにはおこななかった。
- 136到底人力の為すなきを思わしめる。(新潮文庫「春」)  
この「しめ」「しめる」は使役の助動詞。口語の助動詞としても使われるが、まだ生硬で文語的であると言える。「為すなき」も文語調。
- 44正義を愛するの念において……あえて人には劣らなかった。(岩波文庫「新生」前)
- 114兄の所置に対しては感謝しながらも、なおそれを惜しいと思うの念が心の底に残った。  
これはいわゆる漢文によって教えられた語法。
- 32この「おじさん」がいい時代に向かいつつあることは……。
- 39夏期学校へ行ってみるのもよかろうというふうに心配しつつ許してくれた。
- 39雑草は……あとからあとから頭をもたげつつあった。
- 47ベルの音は朝の八時ごろの空気に響き渡りつつあった。
- 54もう空の色が変わりつつあった。
- 88捨吉はおっさんの突然な上京を不思議に考えつつ寄宿舎を出た。
- 96自分のことがうわさに上りつつあるというに……。
- 146せっせと怠らずたくしつつあった彼のような青年にとっては……。
- 146彼が心に……待ち受けつつあるものと、現に一足踏み出してみたこの世の中とは……。
- 165春のあゆみははや花より若葉へと急ぎつつある時だった。  
この接続助詞「つつ」は文語にも口語にも用いられるが、どちらかといえば、語調からはまだ文語的と言える。「つつある」という形が最も多く使われている。  
以上文語または文語的な語として述べて来たものは、藤村の筆くせとして捉らえてきたものである。これらの語を藤村は決して無意識に使っているのではない。それは会話の中には使っていないこと分かる。文章を力強く引き締め、簡潔な表現ができるという文語のよさを十分計算の上用いていると思われる。
- (3)好んで用いる語
- 。「が」
- 19捨吉が同級の中にはずいぶん年令の違った生徒がまじっていた。
- 23大勝とは捨吉が恩人の田辺や民助の兄にとっての主人筋に当たり……。
- 24この恩人が骨の折れた苦しい時代から……。
- 50捨吉たちが子供の時分から……この国に渡来した……宣教師たち……。
- 50捨吉たちが同級生の一人のおとうさんにあたる人……。
- 167捨吉がくちびるをついて出て来るものは……こうしたかれんな歌に変わって来た。  
この「が」は連体修飾語であることを示す格助詞で、普通「の」を用いるところ。現在標準

語ではあまりこの用法がなく、文語体の文とか方言等に用いられる語法である。

。「来る」

22七月らしい夏の雨が寄宿舍の窓へ来た。

54涼しい心持ちのいい風が来て面をなでて通る……。

88寒い田舎の方へははや霜が来るかと思わせた。

92何か心配あっての上京とは、……いちばん先に捨吉の胸へ来た。

117その昔、……樞鳥の落とした羽を集めたりした日のことが彼の胸に来た。

117風が来て桜の枝を揺るような日で……。

134ふとある考えが捨吉の胸に来た。

162おばあさんが……羽織、袴 を用意してくれるころは、一度淡い春の雪も来た。

184彼女の大きく見開いたような女らしい目が彼の身に近く来る。

204溶け易い雪は、……荷物を掛けた彼の肩にも来た。

この「来る」の主語はみな無生物である。「春が来る」などという言い方は一般的な用法で、特にかわった言い方とも言えないが、意外に多く用いられているので、藤村の筆くせとして取上げてみた。

。「ようだ」

6あだかも路傍の人のようにして立っていた。

39どうにでも延びて行く屋根の上の草のような捨吉の様子を……。

57本箱の中にしまっていてある。ちょうど蜜蜂が蜜でもためたように。

74打ち消しがたい後悔を新たにさせるような人々……。

91どうかして人のきげんをそこねないように、そして自分を幸福にするように、とは一日も彼の念頭を離れなかった。

94捨吉も無事でありますように、毎日そう言って拝んでいる。

102善どんでさえもはや小僧とはいえないように、……おたな店者らしい風俗も似合っなりて見えるようになっよて来た。

140「米の病気は十年の不作」を取り返しうる時代に向いて来たかのようであった。

150「何だか青木君もいろいろなことをやっよてるようだね。」

181おとなの世界の方へ……捨吉も出て来たような気がした。

「ようだ」という助動詞は、形式名詞の「様」に断定の助動詞「だ」がついてできたもの。

あるものを他のものに比べたり、類同の状態であることを示したり、不確実な断定を示したり、事物を例示したり、願望む気持をあらわしたりする場合に用いる。

。「……（て）みる」「……（て）みせる」

25「ねえさんも命拾いをしたよ。」と……捨吉に言っよって見せて、ほほえんだ。

32「ホ。なんにもくれなくてもいいんだ。」と捨吉は目を丸くして言っよってみて……。

33それを主人にいろいろなことで教よえて見せていた。

39庭の飛び石づたいにあちこちと歩よいてみて……。

39表門の外へも出よてみて……草むしりに余念もなかった。

47捨吉はもう一人の同級生のことを管よに言っよてみた。

49思い思いに夏期学校へ来よてみた心持ちを比べ合っていた。

53捨吉は友だちと連れ立っよって懇親会へと出よかけてみた。

56玄関の次にある茶の間へも行ってそう 思 っ て み た.

57こう考えて、玄関の壁に掛けてある古びた額の下に立 っ て み た.

91郷里のおっかさんのそばにい て 来 て み たい と 言 い 出 し た…….

151「女の子が生まれ一僕も初めて父親<sup>おやじ</sup>となつてみ た……。」

この「みる」「みせる」は動詞ではあるが、本来の独立して用いられるときの意味を変じ、つねに他の語の下について補助的に用いられるところから、一般に補助動詞あるいは形式動詞と呼ばれるものである。この補助動詞は概念、内容は極めてうすいながら、上に来る動詞の動作の結果、反応を見ようとしたり、試したりする等の意味を持つ。藤村の作品に、世間一般に「みる」「みせる」を用いないようなところにも用いているのはどんな理由によるのであろうか。

「言ってみる」は「言う」に比べると、相手の反応をみるために、こころみに言うという気持が伴い、それだけ婉曲な言い方となる。25の例文「言ってみせて、ほほえんだ」について、「言ってみせてほほえんだ」と言えば言う者の一方的動作であるが、「言ってみせる」は相手に同意を求めたり、またはこちらの言うことに関心を誘うことによって、意志の疎通を計り、結果的にやわらかい表現となる。したがって「ほほえんだ」も相手の共感を得た、あるいは諒解を得た「笑い」となるのではなからうか。藤村の意図もこんなところにあるのではなからうか。

。「方(ほう)」「ころ」「時(とき)」「ところ」「もの」

21奥底の知れない方へ流れ落ちて行く谷川のかすかなささやき…….

21時には御殿山の裏手の方へ、ずっと遠く目黒の方まで……歩きに出かけた。

21彼はこれから帰って行こうとする家の方で、……自分を待ち受けてくれている恩人…….

22よく捨吉は……遠く下町の方にある家をさして降りて行く。

30捨吉は……井戸の方から……手桶をさげて来た。

46学校のチャペルの方で鳴る鐘の音…….

56捨吉はおじさんの家の方へ帰って来た。

69彼も身を逆さまにして舟から水底の方へおどり入った。

71捨吉は田辺の家の方で友達を迎えた。

74捨吉はすでに田辺の家の方からある心の仮面<sup>めん</sup>をかぶることを覚えて来た。

96自分の方ではめったに思い出しもしなかった古いなじみの人たち…….

138その晩、捨吉は何とも言ってみようのない心持ちで、寝床の方へ行った。

142世の中の方へ出て行こうとする。

「方」という語は、ある方向、ある方角とかいうふうに、ある広がりのある場所を莫然とさすときに用いる形式名詞。例文でも分かるように非常に多く用いているのが特徴。これはあるところを小さく点として示すより、莫然と示す方が、ゆとりがあり相手にやわらかく受け取られ、また深みのある、おだやかな表現となるためではなからうか。

54二人して山のはずれへ立ったころはさらに空の色がかわった。

57毛皮の敷物から身を起こしたころは、捨吉は一思いに自分の殻を脱ぎ捨てようと思った。

58おばさんが木戸口から顔を出したころは、捨吉の原稿はあらかた灰になっていた。

35雑談が始まるころには、そろそろ主人の仮白<sup>こわいろ</sup>などが出る。

136一日の売り揚げの勘定が始まるころには、……めいめい算盤<sup>そろばん</sup>を手にして帳場の左右に集まった。

- 185岡見が……青木をたずねたころには、……捨吉は本船町ほんふなちように市川をたずねて行った。
- 95「あの写真をよこしてくれた時は、皆大騒ぎよのい。」
- 186市川の前にすわってみた時は、捨吉は初めて会う人のような気もしなかった。
- 「ころ」「時」ともに形式名詞。形式名詞は上に必ずそれを限定する語句を必要とする。「時」に比べ、「ころ」は、ある「時」を莫然とさすものである。「ころは」「ころには」「時は」という形で用いているのが目立つ。
- 8その辺は勝手を知った彼がよく歩き回りに来るところだ。
- 28茶の間は応接室がわりになっていて、……よく捨吉が茶を運ぶところだ。
- 82三人で腰掛けて日暮れ方の時を楽しむのもその窓のところだ。
- 102その窓の鉄の格子は昔捨吉が朝に晩に行つてよくつかまったところだ。
- 102昔自分が田辺のおばあさんに詰めてもらった弁当を持って学校の方へと通つたところだ。
- 80西鶴の文章は捨吉も争つて買って来てあけて見たものだ。
- 86どうして成駒屋なりこまやの人気と来たらたいしたものだ。
- 107ねえさんも気分のいい時にはその縁先に出て、……病を慰めたものだ。
- 「ところだ」「ものだ」という形で用いるのが特徴。この「ところ」「もの」も形式名詞。「……したところだ」「……したものだ」という場合は、大体過去のことをあれやこれや追懐するとき用いている。
- (4)好んで用いる句
- 。「……することができる」
- 6彼は俵くろまと自分との間にかなりな隔たりを見ることができた。
- 11小鳥のように好き勝手にふるまうことができた。
- 23そういう人たちの中には、……大勝の娘、……樽屋たいかつの娘たるやなぞを数えることができる。
- 38車上の人までもありありと見ることもできた。
- 74彼は幾度となくそれを応用した場合を思い出すことができる。
- 116その辺を歩き回つた時の自分の心持ちを思い起こすことができた。
- 161いっさいを捨吉はありありと自分の胸によび起こすことができた。
- 187ただ笑い方一つで互いの胸に通わせることができた。
- 。「……うとする」「……ようとする」
- 15その日曜を楽しく送ろうとした。
- 16ここへ来て教えを聞こうとするものはかなりある。
- 17洗礼を受けようとする娘が……。
- 19名誉の賞金を得ようとして意気込んでいる。
- 21彼はこれから帰って行こうとする家の方で……。
- 32主人は捨吉の若い心を引き立てようとするように見えた。
- 37主人は捨吉を喜ばそうとしているように見えた。
- 39庭先だけでもきれいに掃除しておいて行こうとした。
- 「う」「よう」は意志をあらわす助動詞。

#### 文章の上から見た特徴

- (1)終止形でない文の結び方

17洗礼を受けた時のことが夢のように捨吉の胸にうかんだ。やはり先生の司会で、……この同じ会堂で。

37捨吉を喜ばそうとしているように見えた。……事業の相続者ともしたいと思うその望みを遠い将来にかけて。

61すべては神の摂理だ。貧しさも、苦しさも。

88「長いことそれでも吾家ではお前さんを世話したものだ。」と目で言わせて。

89「おっかさん」と呼んでみる機会もほとんどもたなかったその人のそばで。

91……と言い出したのは、あとにも先にもその一度きりであったが。

130皆の激しく働くさまをながめた。……吉どんの手つきを。……縄を解く腰つきを。

163……下宿に移った。麴町の学校へ通うには、恩人の家からではすこし遠すぎたので。

以上は倒置法を用いたために、終止形でないことばで文を終止したものである。倒置法とは、ある語句を際立たせるために、文法上、論理上の文節の普通の順序を変更することで、意味や語勢を強めたり、調子を整えたり、微妙な感情を表現するために韻文等に多く用いられる修辭法。藤村が詩作時代のそれを散文に応用したものであろうが、これが面白いことに散文では一面文章をくだけたものにする役にも立っている。

17以前の自分を見つけるような気がした。——英語の一節なぞを書き添えて彼女に贈った自分を。

これも倒置法と見られなくもないが、ちょっと違って、前にある「自分を」というのをさらにくわしく説明したもの。

113彼が学校へ入れられたのは、ゆくゆくはアメリカへ渡り針の製造を研究するためで。

119捨吉は持って帰った卒業証書をおじさんに見てもらったほどで。

この二例は倒置法でなく、断定の助動詞「だ」の連用形「で」でとめたもの。これなども会話的で、読者に話しかけるような気楽さ、気易さを感じさせる。

(2)同一語句、同類語句の繰りかえし

45夏期学校と聞いて真勢さんのように正直そうな目を丸くする人は、捨吉の身のまわりにはほかになかった。なぜというに、その講演はキリスト教主義で催さるのであったから。そして、真勢さんはキリスト教信者の一人であったから。

56夏期学校で受けて来た刺激は忘れられなかった。……まだ彼は友人の菅なぞといっしょに高輪の寄宿舎の方に身を置くような気がしていた。広い運動場の見える講堂側の草地の上に身を置くような気がしていた。……あのチャペルの高い天井の下に身を置くような気がしていた。

61熱心なクリスチャン時代を回想して、先輩から、宗教的な気分を引き出された。……隠遁的な気分をさえ引き出された。

69彼も身を逆さまにして舟から水底の方へおどり入った。あだかも身をもがかずにはいられないように。あだかも何か抵抗するものを見つけて身を打ちつけずにはいられないように。

この四例のうち、45は理由の説明であり、69は心情の比喩的説明である。56・61は回想・追憶のところに用いている。

以下くりかえしの用いられている場面と、語句のくりかえしの回数だけを挙げる。

72英語を学びはじめた時を追想したところ——「引き出された」二回

73新学期に学窓をさして帰って行くところ——「時が来た」三回

74上京した当時の追想——「思い出すことができる」四回

- 91母の上京を迎え過去を思う——「ことがある」五回
- 95母の話すのを聞いて故郷を偲ぶ——「……へ帰って行った」九回
- 106少年時代の追憶——「……したところだ」三回
- 107少年時代の追憶——「……したものだ」三回
- 108同上——「……したのも、それからだ」二回
- 110寄宿舎時代の追憶——「……を思い出した」十六回
- 114空想——「……の方へ連れて行って見せ」三回
- 195正月を迎え、おじさんの家の掃除をするところ——「箒を……へ持って行き」・「……へ持って行った」あわせて三回
- 197旅に出る前、岡見の別荘で、ある夏の追想——「思い出すことができた」三回
- 同一語句、類同語句を繰り返すことによって、文にリズム感を与え、意味の深化を求め、印象をさらに強いものとする。詩の「リフレイン（反覆句）」と同一の効果を持つ。藤村が詩作によって学びとったリフレインをそのまま散文に応用したと考えたらどうだろうか。また、繰り返かえしの用いられているところは、上例によってもわかるように、ほとんど過去の追憶、回想をするところに用いているのも特徴である。
- (3)好んで用いる文章の型
- 「心は……の方へ行った」
- 84捨吉の心は田辺のおじさんの方へ行った。
- 95心は遠く故郷の山林の方へ行った。
- 96彼の心は……子供の時の空の方へ帰って行った。
- 196捨吉の心はとらえどころのないような牧師の言葉の方へ行った。
- 「……に…を見つける」
- 112（久しぶりに会った昔の女友達がオルガンをひいているのを見て）捨吉はそのオルガンの前に、以前の自分を見つけるような気がした。
- 122（横浜に恩人の田辺のおじさんを尋ねたとき）こうした変わった場所に、新規な生活の中に、おじさんやねえさんを見つけることは捨吉にとってもめずらしくうれしかった。
- 194（傷心の捨吉がおじの家に久しぶりに帰ったとき）片すみに本箱を並べて置いてそこを自分の小さな天地とした玄関に、しょんぼりと帰って来た自分を見つけた。
- 「……が（は）……にあった」
- 14（道でふと出会った昔の女友達の姿を思い出して）白い肩掛けはまだ目にあった。
- 108その頃のおじさんは実に骨の折れる苦しい時代にあった。
- 119（病身のねえさんのことを思い浮かべて）ごく静かにこの家の内を歩いていた時の姿が、ついまだきのうかおととい一昨日かのように捨吉の目にあった。
- 133やがて三四時間もしたら白々と明けかかって来そうな短かい夏の夜の空がそこにあった。
- 140（先輩の吉本さんに身の振り方を相談した手紙の返事を受取って）不似合な奉公から、益のない骨折りから、……わずかに出て行かれる一筋の細道がその手紙の中にあった。
- 151（細君にやさしい吉本さんの家庭を見た目で）青木の寓居を見ると、そうした気質に反抗するようなものがここにはあって、それがまたいじらしく捨吉の目に映った。ここでは細君も呼び捨てだ。
- 175（鎌倉の青木の処から帰って）鎌倉の方で聞いて来たさかんな蛙の声はまだ耳の底にあっ



た。

203目の前には、ただ一筋の<sup>みち</sup>道路と、正月らしくあたって来ている日光とがあるばかりであった。

203は、「目の前には」という連用修飾語が主語の前に倒置されているもの。以上の例をみると、「見える」「目の前にちらつく」「聞こえる」「書いてある」「感じられる」等の動詞などかわりに、単に「ある」と客観的に表現しているものが多い。

。「それ」

5「お繁さんじゃないか。」……一目見たばかりですぐにそれがさとられた。

9（先生の家を下宿していたとき）「いつまでも置いてあげたいとは思いますが、……。」  
それが先生の家を辞する時に、先生に言われた言葉だった。

49中には手まねから言葉のアクセントまで外国の宣教師にかぶれてそれが第二の天性になってしまったような……おじさんも……。

52恍惚、感嘆、微笑、それらのものが人々の間に伝わって行く中で……。

53こんもりと茂った桜の木陰はどこでもそれを自分らのものとして好き勝手に歩き回ることができた。

126商法のことになると、……駆け出しの小僧にすら遠く及ばなかった。彼はそれを自分の上と感じた。

この「それ」は上に提示語を持つ代名詞。提示語とは、文中にある語句を特に強調したいという要求から、その語句のあるべき普通の位置からとり出して、文頭または注意され易い位置におくものである。提示語は文であってもよい。こういう用法が目立って使われている。

### 修辭法の上から見た特徴

(1)並立語を用いた表現

11プログラムをあける音がそこにもここにも耳に快く聞こえる……。

49そこにも、ここにも、人々のつかう扇子が白く動いた。

101急に大きくなった手を足を、そこにも、ここにも見つけることができるようになった。

189芝公園、日本橋伝馬町、本船町、そこにも、ここにも、ついた燈火が捨吉に見えて来た。

31いちごは四方八方へつるを延ばしていた。……かれんな繁殖はそこでも、ここでも始まっていた。

51そこでもここでも紙をあける音が楽しく聞こえて来た。

56よい講演が始まってそこでもここでも聴衆が水を打ったようにシーンとしてしまった。

7繁子を載せた俵は……右へ回り、左へ回り……わずかばかりずつ動いて上って行った。

57民助は物を言うかわりに咳いたり笑ったりした。

91……と言い出したのは、あとにも先にもその一度きりであったが。

184勝子はもう捨吉の内にも外にもいるようになった。

194楽しそうな追羽子の音は右からも左からも聞こえて来ていた。

205溶け易い雪は、彼の頬にも彼の足もとにも、荷物を掛けた彼の肩にも来た。

これらはみな連用修飾語で、修辭法上の並立語である。対等の関係にある文節、連文節を並べるものである。特に藤村の場合、前後、左右、彼此等相対立する文節を二つ以上並べ、調子

を整え、読者に快いリズム感を与えるものが多い。中には次のように同一文節を並べるものもある。

39家のまわりに生える雑草はむしってもむしっても、あとからあとからと頭をもたげつつあった。

95忘れていた人たちの名前が、おっかさんの口から引き継ぎ引き継ぎ出て来た。

(2)擬人法を用いた表現

114空想は捨吉の心<sup>たいかつ</sup>を大勝とした紺のれんの方へ連れて行って見せ……。

119(久しぶりに、恩人の家の方へ帰って来て見ると)高輪の方で見て来た初夏らしい草木の色はまたその庭先へも帰って来ていた。

自分が帰って来るのと、草木の色が帰って来る(高輪で見たのと同じ色をしている)のところが二重写しになって、より効果的になっている。

134(学校を卒業して、思いがけなく帳場にすわることになって)あの学窓を離れて来るころに、こうした帳場の前が彼を待ち受けようとはどうして予期し得られたろう。

173堪えがたい寂しさは下宿の離れ座敷へも襲って来た。

前述 202 ページの(3)「好んで用いる語」のところにあげた「来る」の用法も擬人法である。

(3)比喻法を用いた表現

39(恩人の田辺のおじさんが、好學心の強い青年捨吉を見て)まだ年少な、どうにでも延びて行く屋根の上の草のような捨吉の様子をながめた。

52(夏期講習で講師の話しに胸おどらせて)それを彼はポーと熱くなって来たり、またさめて行ったりするような自分の頬で感じた。

102(田辺の家の周囲にいる年の若い人たちがずんずん成長して行くさまを述べたあと)おっかさんに別れを告げて、捨吉は田辺の家を出た。学校の寄宿舎をさして通い慣れた道を帰って行く彼の心は、やがていっしょに生長<sup>しと</sup>って行った年の若い人たちの中を帰って行く心である。

134(大きな希望をいだいて学窓を出た彼が、心ならず恩人田辺の家の商売を手伝うようになったところの描写)広々としたこの世の中へ出て行こうとする彼の心は、勢いこんだ芽のようなものであったが、一足踏み出すか踏み出さないに、まるで日に打たれた若葉のようにしおれた。

137(気の向かない仕事ではあったが、あきらめて商売に打ち込んでいる。そんなあるとき、帳場でソロバンの読み上げをしているのを、「なんだその読み方は。」といって長兄に叱責され、反抗心に燃えたが)小時間の沈黙のあとで、また捨吉は読みつづけた。彼は目上の人に対してと言うよりも、むしろ益のない自分の骨折りに向かって憤りと悲しみとを寄せるような心で。

161(女学校の教師となる前、かつて年上の女性とのなつかしい交際を思い出して)深い感動として残っていた心の壁の絵が捨吉の胸に呼び起こされた。

165(時は春、踏み出した文学の細道をひとり進もうとして、ふと春の景色を眺めて)あわただしい春のあゆみははや花より若葉へと急ぎつつある時だった。捨吉は目の前に望み見る若葉の世界をやがて自分の心の景色としてながめながら歩いて行くこともできるような気がした。

146(文学への熱意は高いが、思うにまかせぬまま)延びよう延びようとしてもまだ延びられない、自分の内部から芽ぐんで来るもののために胸を圧されるような心持ちで、捨吉はよく吉本さんの家の方へ翻訳の仕事に分けてもらいに通って行った。

161(青木が苦しみつつも大いに活躍しているのを見て)捨吉は堅い地べたを破って出て来た

青木の若々しさを尊いものに思った。

「青木の若々しさ」は、青木（人名）と青々とした木との掛詞的用法。

182（年長の岡見が、捨吉のなやみを理解してくれると知って）その時、年長の岡見がまともに捨吉を見た目には心の顔を合わせたようなマブしさがあった。

183（市川という男がときどき奇想天外なことをいうのを）市川という男は、あれはつけ火をして歩くやつだ。

188（困難に突き当たりながらも文学を愛する若者の集まりができて）そこにも、ここにも、ついた<sup>あかり</sup>燈火が捨吉に見えて来た。

201（恋をあきらめようと旅に出るとき、自分の行動を人は気が狂ったとでも思うだろうかと岡見に尋ねると）「いかなる場合でも君は静かだ。ごく静かに君はこの世の中を歩いて行くような人だ。」

204（恋を忘れようとして、義理を欠き、凡てを捨てて旅立つうしろめたさを）だれか後ろから追いかけてくるものがある。のがれ行く自分をとらえに来るものがある。

表現を美しくするために、藤村は以上のように比喩法を多用しているのが目立つ。例文では「……のような」「……のように」という語を用いる直喩法が多い。しかし、「……のような」「……のように」の語がなく、それとなく喩える隠喩法も用いている。102・161・183・188・204などは後者の例である。